遠島流刑のようにつらいと訴えている．岡山県より支給された留学費用は月150円で，また物価が高く予想以上に出費がかさみ，生活が困難であること等を書き送っている．

当時の医学留学生の中では，東大出身者が最も多く，次に岡山出身者が多かった．ほとんどの留学生は妻帯者であり，自戒のためにブレスラウの留学生は，筒井八百珠を会長とする「かかあ大切会」という会をつくっており，坂田はその会の名誉幹事に推薦された．

11月中旬にベルリンからオーデル川に沿うブレスラウ（現ポーランド領）の大学に移り，世界的に有名であった外科教授ミクリッツに師事した．教授の自宅を訪問したこと，大学の回診風景，夜会や舞踏会の様子など，さらにミクリッツの指導によって動物実験による研究を始めたことを報告している．

ブレスラウに移ってからも医学講習会やその他の用件のため，汽車で5時間かかるベルリンまで再三往復している．ベルリンでは日曜日に日本からの留学生とともに郊外のリゾート地を訪れたり，天長節に日本公使館より晩餐会に招待され日本食の御馳走になったり，時には，日本語の教師として滞独中の巌谷小波を指導者として開かれた「白人会」という句会にも出席した．また，乏しい金の中から留学生仲間とともに東欧諸国や，スイスアルプスにも旅行している．

当時は，ドイツでもまだ電話が普及していなかったので，留学生同士は主として絵葉書によって，到着，入学，転学，転居，帰朝の挨拶や，寄せ書き，俳句や歌など，ひんぱんに気軽に情報交換を行っていた．絵葉書は異国で生活する留学生にとって欠かすことのできない大切な通信手段であったし，坂田は美しい絵葉書そのものに関心を持っていた．ベルリンでの留学生の世話役的存在であり，東大内科助教授で後に駒込病院長をつとめた宮本叔は，当時の絵葉書を約600枚持ち帰っており，女婿の遠山嘉雄氏により整理されている．その中には坂田が出したものもあり，それと家族に送った手紙とを照合すると，より詳しく留学生活の一端をうかがい知ることができる．

岡山で開かれた本会の第91回総会で田中助一氏により山上兼輔，長門谷洋治氏により筒井八百珠が発表されたが，山上とはベルリンで同宿であったし，ブレスラウにいた筒井とはとくに親しく付きあっていた．

明治の医学留学生が，ドイツから家族に宛た哀歓に満ちた手紙を紹介する．

33）帝国女子医専創設者額田豊・晋兄弟の医家系譜

The family history of Nukada brothers, the founders of Teikoku Josi Igakusenmongakko (Imperial Woman's Medical College)

中山　沃

Sosogu Nakayama

帝国女子医学専門学校は大正14年（1925）3月，額田豊・晋兄弟によって創設され，次いで東邦医科大学，東邦大学医学部となり今日に至っている．この兄弟は岡山県邑久郡長船町飯井の医師額田篤太，宇多夫妻の長男と次男である．

額田家は太仲―中―篤太―豊・晋兄弟と続く岡山の近郊で重きをなした医家の家系であるが，約10年前，この兄弟の生家から多くの古書籍，写本，文書などが岡山の市中に放出，売買された．演者はその当時その若干を入手したが，医学関係の資料は極めて少なかった．此のたび豊・晋の秀才兄弟を出した額田家の医家としての背景を調査したので発表する．

額田家はもと備前赤坂郡（現赤磐郡）に住み，先祖は浦上氏の武将額田十郎左衛門で，下って備前赤坂郡大刈田郡高尾山城主額田与門正利あり，その末孫は帰農し，同郡の大庄屋を世襲した．

豊らの曾祖父太仲（1809―70）の名は秀恒，字は徳夫，通称太仲，箕山と号した．若くして大阪に遊学し，藤沢東畡（南岳の父）を援けて学塾泊園書院を開いた．のち帰り邑久郡飯井村に医業を開き，郷党病者の師として終始し，明治3年（1870）11月14日死去，年62歳，妻は備前和気郡

伊部村の森氏，3男2女あり，長男一中継ぐ．

一中（1834—98）諱は伯幣，初め文哉と称し，のち一中と改め，碧処と号した．医術を難波抱節に学び，更に安政3年（1856）10月3日，紀州華岡青洲の塾に入門した．漢学を豊後の広瀬淡窓に学び，また長崎に至り蘭学を学び帰国し，医業を継いだ．資性温厚篤実で，学を好み，詩を能くした．明治31年（1898）9月5日，65歳で死去．妻は小野氏，1女（宇多）あり．

篤太（1857—1901）名は則重，幼名は徳太，のち篤太と改名，美作国勝北（現 勝田）郡大町村福原直平の5男．篤太は安政4年（1857）4月に生まれ，文久年間から明治5年まで野々上帯刀，佐々木勇四郎，上森元甫に従い和漢学研究，明治4年（1871）額田一中の養子となり，その娘宇多と結婚，明治5年より11年まで備中の山田方谷，但馬の池田草庵，京都の春日潜庵に儒学を修め，明治11年より樫村清徳に従い，内・外科，ドイツ語を学ぶ．明治12年から同15年まで東京大学医学部別課に学び，同16年卒業，ついで帰郷し先業を継いだ．名声近隣に高かった．明治19年コレラ流行に際し岡山区の避病院長心得に任ぜられる．明治34年（1901）10月1日胃癌のため死去．人となり寛厚沈毅，英邁，著書に「伉儷選択鏡」．4男1女あり，長男豊，次男晋，3男坦，4男貞，長女静子．

豊，明治11年（1878）3月23日生まれ，東京市独逸学協会中学校，第一高等学校を経て東京帝国大学医学科を明治38年（1901）12月卒業，青山（胤通）内科に入局，明治40年（1907）ドイツ・ミュンヘン大学に自費留学，同42年（1909）帰国，引き続き東大付属病院に勤務，大正2年（1913）医学博士，そして東京市麻布（現 港区）今井町に額田病院を創設，院長に就任，同9年（1920）神奈川県鎌倉町に額田保養院を創設，院長に就任，大正14年（1925）東京市大森に弟晋と共に財団法人帝国女子医学専門学校を創立，開校，理事長に就任，その後，幾多の変遷を経て，昭和25年（1950）校名を東邦大学と改称，初代理事長及び学長に就任，同32年（1957）両職を辞任，同47年（1972）7月29日死去，94歳．

晋，明治19年（1886）12月22日生まれ，独逸学協会中学校，第一高等学校を経て大正元年（1912）東大医学部を卒業，恩賜の銀時計を授与，東大第3内科（青山胤通教授），ついで薬理学教室（林春雄教授）に師事，アメリカ・ハーバード大学留学，学位授与を経て順天堂医院の研究所長に就任，大正14年（1925）兄豊と共に帝国女子医学専門学校を創立，初代校長及び病院長に就任，昭和22年（1947）東邦医科大学の設立により学長に就任，同32年（1957）東邦大学の2代目理事長，学長に就任，同38年（1963）両職を辞任，翌39年9月29日死去，77歳．

34）練塀町時代の佐藤尚中

Satō Shouchū in Neribeichō Period (1873—1875)

横浜市　大滝　紀雄

Toshio Otaki

練塀町時代すなわち明治6年より8年に至る期間，佐藤尚中が私立の病院を開き，患者の診療に従事したことは，既定の事実である．しかしこの期間尚中が引き続いて学生の医学講義を実施したことは，文献上明らかでなかった．ところが，尚中の弟子たちによって，私学済衆舎開学願いが明治6年11月東京府に提出されている事実や，尚中自身によるこの期間に出された卒業印書が発見されたため，練塀町時代，尚中による医学講義が実施されていたことはまず間違いないと思われるようになった．

東京都公文書館に所蔵されている書類に，「済衆舎開学願書」がある．提出者は　第五大区小二ノ区浅草西鳥越町甲二番地松平忠敬邸内寄留　山口県営下平民　渡邉泰造で，宛名は，東京府知事大久保一翁殿，日付は明治6年11月となっている．教員履歴を見ると，渡邉のほか，阿部文安，千葉常雄，千葉昌胤，泰真吾はいずれも明治5年以降尚中の弟子であった．この医学校は修業年限2年半で，20歳以上の男子に限り入学させた．

学科は医学に限られ，教科は次の通り5期に分